

明治から見直せば、日本は復活する



林 はやし

英臣 ひでおみ

●プロフィール

政経倶楽部顧問

人間学経営研究所所長。雅号は綜観（そうかん）

東京鍼灸柔整専門学校卒業。松下政経塾第一期卒。

尊敬する人物 聖徳太子、空海、吉田松陰、安岡正篤、

松下幸之助

好きな作家 司馬遼太郎、渡部昇一

好きな言葉 生成發展、修理固成 稽古照今

趣味 神社仏閣や史跡の散策

明治から見直せば、日本は復活する

一、弱者を思いやれなくなった日本人

あの心配さえなければ、ビールはもつと美味しいはずなのに

「なぜ社長をやっているんだろう？もつと楽な生き方があるだろうに……」。多くの経営者が、その人生の中で繰り返し感じる疑問です。仕事が減ることへの不安、人使いの心労、資金繰りの苦心、家族や自分の健康など、あらゆる方面に渡って日常的に大変なことがばかり。

「あの心配さえなければ、今日のビールはもつと美味しいはずなのに」。そう思っ

てしまう毎日ではないかと拝察します。一年三百六十五日の中で、何の心配もなく晩酌を楽しめるといふ日が、果たして何日あることでしょうか。

「私は、すべての仕事をその日の内に片付け、家に帰れば気持ち切り替えられる。そうして心配なくお酒を頂いている」。そういう達観の人も中にはいるでしょうが、たいていは心配を引きずりながら日々を送っているものです。

心胆を錬磨した経営者は別にして、普通は、心配がないと言う経営者くらい心配な人はいません。経営者は全方位に意識を注ぎ、常に問題を発見しては、その解決に当たるのが役割なのです。松下幸之助翁は「社長は心配引き受け所」とまで言われたほどです。

社長は孤独な存在

社長は大変孤独な存在です。最終責任が自分にかかってくるという立場は、その地位に就いた人でなければ分からないものです。社員なら辞表を出せば責任を取ったことになるのかもしれませんが、社長は責任を果たし切らなければなりません。

どこにも逃げられませんし、誰も替わつてはくれないのです。

トップに立ちますと、上に頼れる人がいた頃が、いかに楽であったかを痛感することになります。非難されることを覚悟して決断し、怨まれることを承知の上で人を切らねばならないことが続きます。そういうときでも、自分よりも上の立場の人がいる間は、上司を仰ぎ見ながら事を進められるからまだ楽です。上がいるということ、いろいろな心痛も和らぎます。

自分が一番上。それは大変孤独です。それを乗り越えて社長を続けるのは、一体何のためでしょうか？それは仕事の意味とか、経営者としての使命感でしょう。それらが腑に落ちていないと、困難に負けないだけの踏ん張る力が出てこないのではないかと思うのです。

潰れるのは、苦勞の意味が分からないから

人間は心の動物です。心に何を思うかで、体調も大きく左右されます。楽しいことなら少しも疲れないのに、嫌なことだとたちまちくたびれてしまう。大好きなゴ

ルフに行く朝はシャキッと目覚めるのに、月曜日の朝はすこぶる目覚めが悪い。そういうことは日常、誰もが体験していることです。

同じ長時間の歩行でも、目的地も告げられず罰として無理矢理歩かされているのと、趣味の山歩きとして頂上を目指すのでは、全然疲れ方が違はずです。

人間は苦勞では潰れないものです。よほど過酷な環境に置かれるとか、過勞状態が続くとかいうのなら別ですが、そうでない限り人間は、けっこう丈夫なものです。問題は、その苦勞の意味が分からないときなのです。どこに行かされるのか知らされていない。何のためにやるのか教えてくれない。そういう状態ですと、どうしても根気が続かなくなりません。

経営者の皆さんが、日々の苦勞に負けないで経営を続けていられるのは、目の前の業務に追われつつも、仕事の意味や目的を一所懸命見出しているからではないでしょうか。そうでなければ、もっと別の楽な生き方を選んでもおかしくはないと思うのです。

仕事の意味や目的を明らかにすることで、トップ自らが最高の熱意を持つ。そし

て、その熱意が社長から幹部、幹部から社員へと伝わって会社に求心力が起こる。組織とは、そういう精神エネルギーの集合体なのです。

日本人に見られる精神の墮落

さて、経営者の皆さんが、そのように毎日苦勞されているのを理解した上で、お願いしたいことがあります。それは、ご苦勞の中に、天下国家を変えようという志を加えて頂きたいということです。「我が社を守ることだけでも精一杯なのに、何が天下国家だ？」と、お叱りを頂くかも知れません。でも、経営者の皆さんにこそ、やって欲しいことなのです。

そのことを訴える前に、最近の日本人に見られる精神の墮落について述べさせて下さい。それが、皆さんへのお願いの伏線になると思うからです。

今年、東京都で起こった少年グループによる犯罪なのですが、二十歳と十五歳の知的障害者の男性が暴行され金品を奪われました。二十歳の男性は、少年らから一時間に渡って顔や腹を殴られ、八万円を奪われたのです。少年らは、その後も男性

を呼びだし、携帯電話や金を騙し取りました。また十五歳の知的障がい少年は、六時間以上に渡り頭をギターで殴られるなどしたとのこと。

少年グループは、奪った金を健康ランドやゲーム代に使っていたそうです。グループの中学三年生の少年は、「自分より弱そうな相手を選んだ」と容疑を認めましたが、「障害者をいじめて何が悪い」という態度で反省の様子がなかったというのです。

(事件の内容はMSN産経ニュース・2008・8・22から引用)

行き過ぎた個人主義教育の弊害

それにしても、弱そうな障害者を襲うことを恥とも思わないで平気でいるという精神構造が、どうにも理解できません。女性・子供・お年寄り・障がい者など、弱者には手を出さない。一人前の男なら、そういう人たちを守らねばならない。それが、昔の日本人の常識でありました。確かに昔も、弱い者いじめはありました。でも、そうすることが恥であるということは分かっていたはずで

今は、弱そうな相手を多数で襲って勝っても、とにかく勝ったのだからそれでい

いとする風潮があるというのです。大体ケンカなどというものは、自分よりも強そうな相手に立ち向かってこそ、よくやつたと喝采を浴びヒーローになれるものです。弱者を相手に勝ったことを喜び、周りもそれを認める。そういうこと自体が、社会心理の歪みの現れではないかと思えてなりません。自分さえよければ、結果さえ勝っていればいいとする、行き過ぎた個人主義教育の弊害です。

自分が知的に劣っているという事実を知りつつも、一所懸命仕事に努め、あるいは勉強に励んでいる彼らを、ただ弱そうだからという理由でいじめるとは、本当に言語道断です。

しかし、加害者もまた可哀想な少年たちでしょう。男としての真の勇氣や誇り、恥や忍耐といった精神を、少しも教えられないまま育ってしまった半人前なのですから。

現代の経営者は、そういう一人前に育っていない若者を採用して、それを社会に通用する人間に育て直すところからやらなければいけないのですから、その苦労たるや並大抵なことではありません。

知的障害者施設で知った「認め合いの文化」

筆者は高校から二十代の前半にかけて、仲間と共に特別養護老人ホームや知的障害者施設など、いろいろな福祉施設でボランティア活動に励んだ経験があります。ある知的障害者施設では、子供たちが毎回とても温かく我々を迎えてくれました。

浜松市内にあったその施設は、最寄りの停留所でバスを降りてから、田園の中を歩いて行った先にあります。子供たちは我々を見つけると、手を思い切り振りながら大きな歓声を上げて出迎えてくれるのです。

施設では、掃除やイベントの手伝いなどをしましたが、一番楽しかったのは一緒になって遊んだときでした。ときどきソフトボールのゲームもしました。ソフトボールは二つのチームに分かれて対戦するのですから、ボランティアの我々は半分ずつに分かれます。戦力が偏らないためです。

子供たちも二チームになりますが、分け方に驚きます。子供たちの中にリーダーとサブリーダーがいて、この二人がまず両チームに分かれます。そして、チーム力が拮抗きっこうするよう、参加希望の他の子供たちを上手く振り分けていくのです。

なかには、バットを振ることさえままならない重度の子がいます。喋ることも容易ではありません。塁にランナーがいる得点のチャンスに、打順が重度の子に回ってくることもあります。ところが、誰も文句を言ったりしません。

「代打を出すから、お前はここで交代しろ」、なんてことがないのです。順番で打席が回ってきたのであり、その子が自分にできることを一所懸命やったなら、それでいいとする「認め合いの文化」があつたのです。

何かで優れているなら、それを人のために生かそう

ささやかながら、そんなボランテニア体験があつたこともあつて、知的障害者を見た目で劣つた者と判断したり、これを蔑んでみたりする行為は間違ひであると思つていきます。だからこそ、障害者を襲う事件に悲しさと怒りを覚えたのです。

筆者は、知的障害者を健常者の下に見てしまうような、その意識そのものが異常であると思つています。知識や能力の優劣と、人間性や人格の上下は別です。むしろ、健常者とされている一般人のほうが、はるかに人間的に歪んでいる人が多いの

ではないかと感じます。

我々の社会は、利欲や名誉欲に満ちあふれております。あらゆる組織に、足の引つ張り合いや妬み合いが存在し、いつも権力闘争に明け暮れています。相手を倒すことにのみ喜びを感じている人が、どれほど多いことか。

そういう世の中に終わることのないよう、人間の意識レベルそのものを、もっと高めなければなりません。低レベルの争いを繰り返すために、人類が誕生したのではないはずで

す。そもそも、自分が人よりも何かで優れているならば、それを皆のために活かしたらいいでしよう。勉強、スポーツ、発明や発見、芸術や文学、何であれ自分に与えられた資質・天性は、誰かのため何かのために役立ててこそ意味があるはずで

す。それは、人の役に立つことで自分も幸せになれるという「喜ばれる喜び」です。

互恵互助の東洋型共生主義社会へ

どうやら優秀といわれる人たちほど、名利への欲望や飽くなき闘争心を起こして

しまうようです。そういう心理が影響してか、組織というものは必ずしも優秀な人ばかり集めても上手くいきません。仕切りたがる人は一〇二割で、あとは指示を受けてから頑張れるというタイプで構成されるほうが、成果を生みやすいのも事実です。

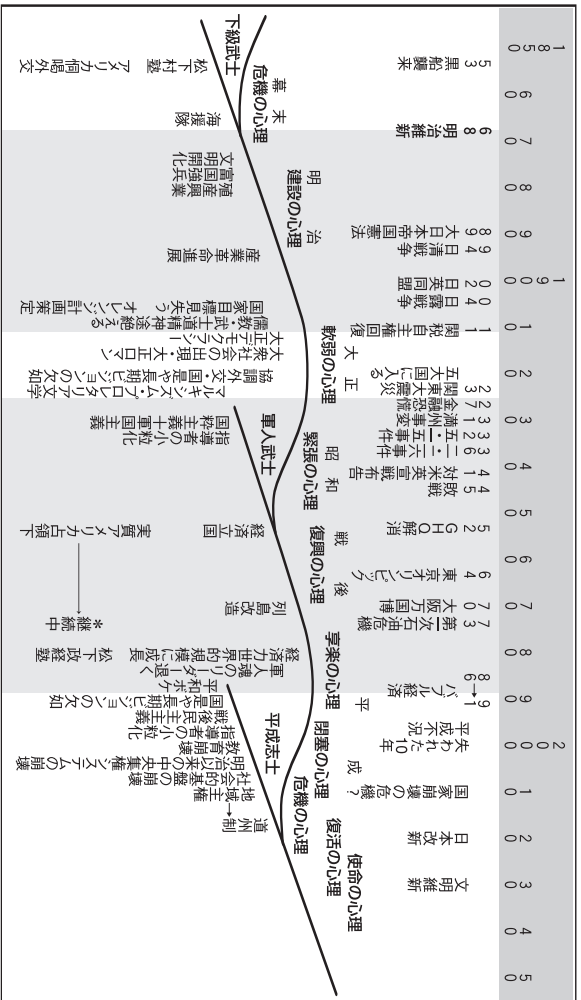
また現在立派に成長している会社も、はじめから優秀な社員ばかりでスタートできたわけではありません。そのとき勤めてくれた社員の、その総合力を活かし切るよう苦労してきたのが中小企業の社長さんたちでしょう。

障害者といえは、企業にはその規模に応じて障害者を雇うことが義務づけられております。その意味は、単なる義務をこえたところにあると思います。

理想論と笑われるかも知れませんが、会社はお互いを磨き合う道場です。道場ならば、いろいろな人物がいるものです。健常者と障害者が、それぞれそう呼ばれることの垣根をこえて切磋琢磨できないものでしょうか。それができるならば、先に述べたような知的障害者を暴行して平気な少年は生まれません。そういう人間教育にも、経営者の役割はあるはずで。

思えば現代社会は、知識の暗記能力や、部分的な才能などで優劣を決め過ぎてきました。これまでの優勝劣敗の西洋型資本主義社会から、互惠互助の東洋型共生社会をつくるのも、今後の経営者の役割でしょう。

この世の仕組みは、決して直線進化や優勝劣敗だけでは理解できません。むしろ諸行無常や盛者必衰こそ、全体を見たときに分かってくる真実です。日本の経営者は、もつと東洋思想に学ぶべきだと思ふ所以ゆゑんです。



一、幕末維新期から平成に至る、近・現代日本の社会心理

幕末維新は「危機の心理」

「知的障がい者をいじめて何が悪い」という少年を育ててしまった原因は、一体どこにあるのでしょうか。行き過ぎた個人主義教育がいけなかったと述べましたが、その真因をもっと明らかにしたいと思います。これを明らかにすることが、これからの経営者の使命と、政治を変えなければいけないことの理由をはっきりさせることにつながるかと考えるからです。

その結論を先に述べましょう。日本人の精神の崩壊は、明治維新による文明開化・西洋化に伴って、東洋思想や日本精神を捨て去りすぎたところに深い原因があります。戦後からダメになったという意見も多いのですが、それだけでは日本が悪くなった理由はつかめません。そのことを歴史の変遷、特に社会心理の変化から説明してまいります。

人間に、そのときどきの心理状態があるように、社会秩序にもその時期の社会心理というものがあります。その推移を見てまいりますと、今日の混迷の原因、それも深因・真因と呼べるものが浮き出てくるのです。

最初は幕末維新期です。幕末は「危機の心理」が日本を覆いました。幕末志士たちの危機感から、明治維新が起こったことを見逃してはなりません。

北からはロシア、南からはイギリスやフランスが、東アジアを侵略しようとしておりました。それら西洋列強に対して、いかにして日本を守るか。それが幕府や藩をこえての、志士たちに共通した志であったのです。

明治は「建設の心理」

それが、明治維新後の「建設の心理」を導きました。明治時代における最大の脅威は、何と言っても南下政策を進めるロシアでした。ロシアは、幕末の文久元年（一八六一）に軍艦を対馬に上陸させています。このときは勝海舟らが、イギリスを巻き込むことで追い払うことができました。その後、とうとうロシアは満州（奉天）

を軍事占領します（一九〇三）。このロシアの南下政策が朝鮮半島を危機に陥れ、日清戦争（一八九四）や日露戦争（一九〇四）の原因となっていたわけです。

アヘン戦争で中国を侵略したイギリスも脅威ではありますが、それよりも当面はロシアが日本の存立を危うくさせる大国であったのです。今から思えば、戦争なんてしないほうがいいに決まっていますが、そのときの選択の理由というのは、そのときの心理に立ってみなければ分からないものです。

要するに、鎖国を解いたばかりの日本は、いかにして西洋列強に負けない国をつくるかということに全精力を集中せざるを得なかったのです。そのために相手から学び、列強をお手本にして近代国家を建設したのです。そうしなければ、中国のごとくインドのごとく支配されてしまうことは目に見えておりました。

そうして「建設の心理」に乗って、我が国は近代国家として必要な諸制度を確立していきました。廃藩置県（一八七一）、郵便制度実施（一八七一）、学制公布（一八七二）、徴兵令（一八七三）、日本銀行設立（一八八二）、内閣制度創設（一八八五）、大日本帝国憲法発布（一八八九）などです。

明治の指導者までは、武士道精神を身に付けていた

明治の次は大正時代です。この時代は「軟弱の心理」となります。明治の力強さから、一転して軟弱の心理へと移ってしまったのはなぜか。それは、明治時代までの指導者の、その人生観を形成していた儒教や武士道精神が、大正時代になると消失してしまうからです。

肝腎なことを述べます。歴史の区分は一八六八年の明治維新で、近世（織豊・徳川時代）と近代（明治以降）に分けられます。ところが精神構造では、明治が終わって大正時代に入る頃に断層があるのです。

明治維新を迎えて文明開化が興り、日本人は鬘を切って帯刀をやめます。服装も、洋服に変わっていききました。でも、精神まで一気に西洋化するということはありません。教育に基づく基本精神というものには、世代が交代しない限り簡単には消えない定着力というものがあるのです。

具体的に言いますと、日露戦争当時の指導者の信念を支えていたのは、他ならぬ武士道精神だったということです。首相の桂太郎、外相の小村寿太郎、それから戦

費調達のためイギリスに渡った高橋是清らは、それぞれペリーの黒船来航から一二年後に生まれた下級武士でした。明治維新を迎えたとき、彼らは十数歳。つまり、人格形成の一番大事な時期に受けた教育が、武士道であったということが重要なことです。

彼らを代表とする明治の指導者の精神を規定していたのは、明治以降の近代精神であるデモクラシーや自由思想ではありませんでした。そうではなく、それ以前の儒教・武士道精神にあったということを忘れてはなりません。

人物や英雄を否定し、平凡を理想とする風潮

時代が大正を迎えますと、近世の教育を受けた者が第一線を退きます。後を受けた明治生まれの指導者は、もう武士ではありません。『論語』素読の経験もないような者たちが世に出ていったのです。それが、大正時代の「軟弱の精神」の一因となったというわけです。

大正デモクラシー、大正モダニズム、大正ロマンなどという言葉が、武士道の終

焉と大衆社会の出現を如実に示しております。文学では、個人主義を追求した白樺派が大いに活躍しました。

人物や英雄を否定し、平凡を理想とする考え方も、この頃の社会風潮にありました。自由を履き違え、野放図を理想とする教育者も現れました。平和外交といえは聞こえはいいのですが、大正時代の協調外交には、ビジョンが不明瞭な弱腰外交であったという批判もあるようです。

こうして大正時代には、おしなべて社会一般に「軟弱な心理」が広まりました。それにしても、明治時代の無骨とも言える「建設の心理」から、一転して大正時代の「軟弱の心理」へと、よくも変換したものです。

明治時代に見られた発展の勢いは、大正時代に入ると鎮静します。しかし、その“余熱”は続きました。それによって大衆社会が爛熟したのが、大正という時代であったわけです。

昭和時代は「緊張の心理」

続く昭和時代は、これまた一転して「緊張の心理」へと変わります。大正十二年（一九二二）に起こった関東大震災は、日本経済に大きな打撃を与えました。その影響で昭和に入ると、取付騒ぎの金融恐慌（一九二七）が起きます。さらに世界恐慌（一九二九）が重なり、大正時代の“平和ボケ”が一変したのです。

悪いときには悪いことが続きます。東北に大冷害が起き、農村不況が深刻化します。

政治面では、下剋上とも呼べる現象が起き、「緊張の心理」が時代を覆いました。政府の言うことを軍部が聞かなくなるのです。軍部内でも、参謀本部を無視して関東軍が満州事変（一九三一）を引き起こします。

それから、海軍青年将校を中心とするクーデターである五・一五事件（一九三二）や、陸軍青年将校を中心とするクーデターである二・二六事件（一九三六）が起きました。これらは首相や大臣らが暗殺された大事件なのですから、明らかな下剋上の事件と言つていいでしょう。

この下剋上の風潮がいわゆる軍国主義を導き、日中戦争や太平洋戦争（大東亜戦争）へとつながります。太平洋戦争では、数多くの犠牲者を出し、国富を大きく消

耗しました。最後は二つの原子爆弾を投下され、敗戦を迎えるに至ります。

中国を背後から動かしていた米・英・ソ連

戦後になって日本は戦争責任を問われ、開戦の原因がすべて日本にあるといった非難の声も上がりました。しかし、戦争には双方に主張というものがああり、責任が一方のみにあるということは通常ないものです。

日中戦争であれば、中国の背後にいた外国勢力の存在を忘れてはなりません。蒋介石率いる国民党軍を、背後からアメリカやイギリスが支援していました。毛沢東が指揮する共産党軍を、後ろからソ連が操っていました。

つまり日本は、中国と戦ったというよりも、これを裏から動かしていた米英、さらにソ連と対戦していたという見方さえあるのです。また、日中戦争の発端となった廬溝橋事件（一九三七）は、中国共産党の罾であるというのが定説となりつつあります。共産党が、日本軍と国民党軍の衝突を仕組んだのです。ずるずると大陸の奥深くに、引きずり込まれる戦いとなつたのもむべなるかなです。

コミンテルンの策謀に操られた日本

それから、ソ連のスターリン、言い換えればコミンテルン（国際共産党）の策謀も知っておく必要があります。その要点は二つありました。一つは、日中の和平を潰し、日中戦争を長期化させることです。もう一つは、日本軍を北（ソ連）に向かわせないよう、南進政策を導くことでした。いずれも、ソ連を守ることが狙いでした。

もし日本軍がソ連に向かえば、東から日本、西からドイツに攻められて大変です。そうさせないためには、日中戦争で疲れさせることと、進路を南、すなわち対米・英・仏・蘭に誘導する必要があります。その結果が太平洋戦争だったので。

コミンテルンが送り込んだスパイとして、この国際的謀略を遂行したのが、表面は駐日ドイツ大使顧問であったゾルゲと、その指令の元に動いた尾崎秀実らでした。戦前の政治家や右翼・軍部は、まんまと彼らに操られてしまったのです。

もともと日本は、中国との戦争を望んでいませんでした（不拡大方針）。満州に活路を求めたのは、世界恐慌の後で進んだブロック経済化が原因でした。国家の存立

と東アジアの安定のため、満州に理想国を建てようとしたのです。

中国に軍隊を送り込んだのも、戦争を起こすためではありません。在留邦人の生命・財産が脅かされる事件に対して、これを保護するための派兵でした。自国民を守るために軍隊を送るのは、駐兵権として清が各国に認めていたことであり、これを侵略と決めつけるのはいかなものかと思えます。

むしろ糾弾されるべきは、日中の摩擦を長期化させ、とうとう戦争へと引きずり込み、両国に多くの犠牲者を出させたスターリンや米・英の野望のはずです。

第二次世界大戦は大狸・中狸の化かし合い

少々歴史の解説が長くなっていますが、経営者として学んでおくべき歴史と思つて読み進めて下さい。まず経営者から、日本人としての誇りを取り戻して欲しいのです。そのためには、歴史を全体からつかんで真実を知る必要があります。

第二次世界大戦の頃の世界を、全体から見て下さい。当時の世界は、陣取り合戦の最中にあつたのです。早くに植民地を獲得していたアメリカ、イギリス、フランスな

どの連合国と、遅れて帝国主義の段階に達したドイツ、イタリア、日本による枢軸国との衝突がこの大戦でした。これを自由主義国家とファシズム国家との戦いと位置付けるのは、歴史の片面の見方と言ふべきでしょう。

アメリカとの関係ですが、排日移民法（一九二四）や石油禁輸措置（一九四一）によつて、関係を悪化させられた経緯がありました。日本は、アメリカとも戦いたくはなかつたのです。でも窮鼠猫をかむの譬えの通り、追い詰められて立ち上がったのがハワイ真珠湾攻撃でした。これも奇襲攻撃などとは程遠い仕組みられた戦いであり、日本海軍機動部隊の動きはあらかじめキャッチされていたのが真実のようです。

第二次世界大戦は、まさに大狸・中狸による化かし合いでした。アメリカのルーズベルト、イギリスのチャーチル、ソ連のスターリン、ドイツのヒトラー、イタリアのムッソリーニ、中国の蒋介石や毛沢東たちです。これらが知恵の限りを尽くして、覇権を握ろうとしていたのです。

振り返れば、彼らの野望が渦巻く中で、よくぞ日本は世界を相手に戦つたものです。世界史の中で、ここまで小国が世界を敵に回して戦つたという例は、ちよつと

見当たりません。戦争を賛美するつもりはありませんが、世界を相手にひるまなかつた日本人の勇武の精神は、世界史に深く刻まれたものと思います。

太平洋戦争に負けた原因

どんな結果にも、必ず原因があります。日本の敗戦には、負けるだけの理由がありました。そのポイントを、ここで述べておきましょう。経営者の皆さんにとつても、経営の上で大いに参考にしていただけではありません。

まず、戦争の計画というものがありませんでした。どう戦い、どこで終わらせるかという見通しがなかったのです。企業ならば、経営ビジョンや中期計画がないのと同じです。しかも、石油は備蓄が尽きれば終わりです。南方のインドネシアなどに石油や資源を求めて進出しますが、いかにも不安定な方針です。

いわば、資金があまりにも不足している状態での開戦だったのです。もともと戦争を望んでいたわけではないのですから、作戦計画がなかったのも当然と言えば当然のことでした。...

それから、日本はドイツをあてにし過ぎました。ドイツがヨーロッパを制圧し、アメリカがこれに忙殺されれば、日本にも活路があると考えたのでしようが、あまりにも（悪い意味での）他力本願でした。

また、内閣・陸軍・海軍の三極構造も問題でした。軍部が内閣や議会から独立しており、それが軍部独裁を許す元になったのです。

これは明治憲法の欠陥の一つと言われているのですが、軍隊の指揮統率権である統帥権が、天皇の専権として独立していました。軍部はこれを根拠にして、内閣や議会の言うことを聞かなくなったのです。

その軍部も、陸軍と海軍が犬猿の仲にありました。それぞれの「組織としての戦争」はあっても、日本軍全体の戦いはなかったと、多くの研究者が評しております。他にも負けた原因がいろいろあります。以下に、箇条書きで示しておきます。

- ・ 暗号がすっかり解読されていた。
- ・ 陸軍が経済を知らず、予算をくれと言うだけ。
- ・ 索敵が軽視され、レーダーがなかった。

・時代遅れな艦隊決戦主義から抜けられなかった。
統制の取れた戦いができていなかったのですから、これでは敗れるのも当然でしょう。経営に置き換えれば、すぐに分かることです。しかも、指導者の矮小化という問題もありました。

人物は時代と共に小粒化する

人物というものは、歴史の時期によってその大きさが変化します。最も器量の大きい人物が登場するのが、社会が変わる転換期や建設時代の初期です。型破りな豪傑タイプが幅を利かせます。社会そのものに、大人物を受け入れるだけの器があるわけです。

やがて建設が進めば、実務に有能なタイプが世に出やすくなります。真面目な能吏です。でも人間としては、面白みに乏しくなっています。

その後、爛熟期から衰退期へ向かうに従って、指導者はどんどん小粒化します。世に出るのは私利私欲に敏感で、己の出世しか眼中にないような輩ばかり。当然の

ことながら大物ほど敬遠され、指導層から外されていきます。

それは太平洋戦争頃の日本も同じです。既然大正時代に、人物・英雄の否定と、平凡の礼賛が起こっていたと述べましたが、昭和に入ってその傾向は、ますます顕著になりました。軍人も官僚化し、陸軍・海軍内部での立身出世が価値基準になってしまったのです。

評論家の小室直樹氏は「日本は物量戦に負けたのではない。技術力で負けたのではない。指導者の無能力が原因で負けた」のだと断言されています。（小室直樹著

『日本の敗因』講談社百八十ページ）

日本人の小粒化については、外国人からの指摘もあったようです。明治、大正、昭和と時代が進むにつれて日本人は矮小化し、人間的につまらなくなりました。フランス人やドイツ人、アメリカ人からも、そういうことを聞かされたこと、昭和の首相指南役・安岡正篤氏の著書にあります。（安岡正篤著『経世瑣言』明德出版社三百十四～三百十五ページ）

こうして、明治以降の日本史を概観しますと、明治時代は社会秩序の上昇期、大

正時代がその頂上期、そして昭和に入って敗戦までが下降期と捉えることができます。山でイメージしていただくと分かりやすいでしょう。

アジアで最初に近代化を成し遂げた後、次第に欧米の圧力に苦しめられ、これに必死に抵抗を試みるも結局敗れた。それが日本の近代史だったのです。

戦後は「復讐の心理」

そして戦後となりました。勤勉な日本人は、戦後復興に邁進します。世の中全体に「復興の心理」が満ちました。特に活躍したのは、戦争で生き残った兵隊さんたちです。軍人武士である彼らは、政界・官界・産業界など各界に入って命懸けで奮闘しました。

苦しいことがあっても「自分は一度死んだ人間だから」、「死んでいった仲間のことを思えば何でもない」と頑張りました。そのお陰で、我が国は瞬く間に復興を遂げることができたのです。高度経済成長の中、東京オリンピックが開催され（一九六四）、東海道新幹線が開通し（一九六四）、大阪万博が開かれました（一九七〇）。

さらに第一次石油ショック（一九七三）を乗り越え、八〇年代に入ると日本の経済力は世界的規模に成長します。しかし、その頃が戦後のピークでした。戦後復興を支えた軍人武士が第一線を引退し、そこから先の日本を導ける指導者がいなかったのです。

バブル経済と「享楽の心理」、その後の「閉塞の心理」

そして、バブル経済の時代を迎えました。額に汗して真面目に働くのは馬鹿馬鹿しいとする「享楽の心理」が、この国を覆ったのです。土地・建物、美術品や骨董品、高級自動車など何でも投機の対象となり、まさに泡銭あぶくぜにを手に入れる成金たちが世に溢れます。

常識では考えられない社会現象が起りました。会社に内定すると、囲い込みのために海外へ連れて行かれる。高校を卒業したばかりの新人女子社員に、ボンと軽自動車一台がプレゼントされる。今年入社の新入の初任給が、先輩社員よりも上。新幹線はグリーン車から満席となり、乗客の多くはブランド物のスーツを着こなし

た若者たち。裏通りの借家が地上げの対象となり、そこに住んでいたお婆さんに高額の立ち退き料が舞い込む。

そんな状態が長く続くわけがありません。誰かが最後にジョーカーを引くことになるはず。頭ではそう思いつつも、我も我もと金の亡者になってしまったのです。

バブル経済は、あつという間に終わりました（一九八六〜九一）。この間に、昭和から平成へと時代が移ります。失速した日本経済は平成不況を招き、「失われた十年」となりました。繁栄に酔った後の落ち込みは淋しいものです。社会は「閉塞の心理」となりました。

政治においては細川政権が誕生し（一九九三）、自民党が下野するという政変もありました。しかし、本格的に日本を改新する勢力に成長することはありませんでした。その後自民党が盛り返し、却って旧い保守政治を存続させる結果を導いたとも言えるでしょう。

こうして、戦後史にも一つの山があったと見ることができます。戦後復興を進めた八〇年代半ばまでの上り坂、バブル期の山の頂、そしてバブル崩壊以降の下り坂

です。

三、日本復活の三カ条

日本は、アメリカと中国にはさまれる

ここからは、今とこれからを論ずることになります。現下の日本は、国としての方向性が定まらないまま、国威をどんどん下げております。度重なる役人の不祥事、多くの業界に蔓延した偽装問題など、「信」をすっかり失いました。まだしばらくは、下り坂が続くことでしょう。

目標を失った国家の危うさ、哲学を捨てた国民の脆さというものをつくづく感じます。現象的にはもっと悪くなって、おそらく二〇一〇年から二〇二〇年頃が“底”となるのではないかと予想します。日本人が結束し希望が見えて来るまでは、底を這う苦しい時代が続きます。

そして二〇二〇年頃には、新しい日本の社会秩序を誕生させねばなりません。こ

れを何としても実らせませんと、日本列島にどこか余所の国旗がはためくことにもなりかねません。大袈裟に聞こえるかも知れませんが、世界が一段と不安定な方向に向かうことを考慮しますと、それくらいの危機感で臨まなければ今後の日本は守れないでしょう。

アメリカですが、日本の安全保障をこの大国に頼れる期間は、もうじき終わることを覚悟しておかねばなりません。アメリカが東アジアから退く日が、そう遠くない将来に迫っているということです。アメリカの国力は、社会秩序の寿命として次第に落ちてまいりました。アメリカ資本制の社会秩序は、数十年後に終焉のときを迎えるという予想もあります。したがって、これをいかにしてソフトランディングさせるか。それが、世界の課題になるでしょう。

一方、中国はどうでしょうか。この国は大変な成長力を秘めているのですが、貧富の差や社会規範の弱さ、少数民族問題や環境問題など、あまりにも内政に多くの問題を抱えています。今後の動向に、不安がいつぱいあるわけです。

中国に対しては、民主化を進めて、信頼感と自由度の高い社会を築いてもらうと

いうこと。それを求めるのが、対中外交の基本路線となります。

このアメリカと中国という二つの大国にはさまれて、日本は生き筋を見出していかねばなりません。日本人の本気の自立心と、自国を守ることへの覚悟が必要となるでしょう。何事であれ崩壊という現象は、内部が腐ったところへ外部から力が加わったときに起こるものです。国の内部をいかに整えるか。それが日本政治の大きな課題なのです。

本格的な国是を立てよう！

そこで必要となるのが、以下に述べる日本復活の三カ条です。

第一に、国是が必要です。国是とは、国としての目標や方針であり、国民が共有できる希望とも申せます。苦勞して困難を乗り越えていくことのできる、国民生活の意義と言い換えてもいいでしょう。

明治以降この国は、二度国是を持ちました。どちらも四十年前後しか保ちませんでしたから、正確には疑似国是と言うべきものです。

一回目は明治時代の基本政策であった、文明開化・富国強兵・殖産興業です。これらは、いずれも日露戦争に勝利し、明治が終わる頃までに達成してしまいました。その後大正時代に入ると、そこから先の国家方針というものがなくなります。その反動で、昭和に軍国主義が起ったと見る事ができます。

二回目は、戦後の経済立国でした。これも、八〇年代の後半頃までに成し遂げてしまいます。そして、バブル経済の発生と共に方向性を失いました。

その後「失われた十年」という時代がありました。失ったのは国家の希望としての国是でもあったのでしよう。

国家も会社も人も、本当に原点が大事です。はじめにどんな原点を宿しているか。それがゴールを決定してまいります。最初にはないものは最後までないということ、二回の擬似国是からしみじみと感じてまいります。

これからは、もっと何世代にも渡って共有できるような、耐用年数の長い本格的な国是を立てましょう。例えば、現代文明を超える共生文明のモデルを興す、といった国家目標です。日本は、人類のモデル国家になるといくらいの目標をもつべきです。そうであって、はじめて国民は本気になれると思うのです。

変革は、横並びからは起らない

日本復活の三カ条、その二が志士群の出現です。変革というものは、人々が横並びでいる内は進みません。周囲に合わせることはかり考え、誰かがやってくれるだろうと他人まかせに生きている人はかりでは、何も起こせないのが当然でしょう。

やはり、せり上がるリーダー層というものが必要です。変革の先頭を行く志士群、それを支援する志民層がそれです。

明治の上り坂の場合、主に下級武士が国家建設の指導者となりました。戦後復興の上り坂では軍人武士、すなわち戦争に生き残った人たちの多くが、時代を支える担い手となってくれました。

では、三回目的の上り坂を二〇二〇年頃から興すとすれば、それを担うリーダー層はどこにいますのでしようか？

筆者は、政治面からその担い手を育てようと、政治家育成講座を手がけています。

「日本を変え、世界を救う志士政治家となれ」と打てば、ちゃんと響いてくれる若者が、今の日本にも沢山いるのを実感しています。

そしてその同志に、志士経営者の皆さんに加わっていただきたいのです。志士政治家たちは国家経営を担うわけですが、彼らに経営センスを教えられるのは経営者の皆さんなのです。政治と経営、二つが車の両輪となって日本を変えていこうではありませんか。

武士道精神に帰ろう

こうして過去二回の上り坂は、武士道精神を持ったリーダー層が頑張りました。今回も武士道精神を持った政治家と経営者が育ち、両者が手を携えてせり上がるリーダー層となっていけば、きっと新しい日本がはじまる。筆者は、そのように期待をかけております。

武士道精神とは、仁愛と正義に基づいて、「私」をこえ「公」に生きる精神のことです。もし私利私欲にとらわれて、こせこせした小さな生き方に墮落してしまえば、

武士道においては大きな「恥」となります。そうならないために身体を鍛え、いつでも命懸けとなれるよう精神の錬磨を怠らないのが武士の生き様です。

それには、どうしても超えなければならぬものがあります。それは、近代以降の日本を呪縛してきた欧米思想です。これを脱却しなければ、武士道精神の復活は難しいでしょう。

なお、既にお気付きでしょうが、戦前に武士の教育を受けた指導者（主に下級武士）が退いて軟弱な大正時代を迎えたということと、戦後において軍人武士が第一線を引いてバブル期の享楽を迎えたということとは、一種の相似形を成していると言えるでしょう。

下級武士出身の指導者が引退したら武士がいなくなってしまうように、軍人武士が引退してみたら、戦後民主主義教育を受けた、ひ弱な日本人が残るばかりとなりました。自己中心的で規範意識の薄い、戦後日本人たちです。

明治になって儒教や武士道の伝統精神を捨て、戦後さらに日本精神を失って今に至る。それが近・現代の日本史です。ダブルパンチを受けて、背骨となる信念をな

くしてしまつたわけです。

欧米思想の見直しを

欧米思想とは、「自由」「平等」「民主」などのことです。これらが、日本から志士・人物の誕生を妨げる呪縛になつていふと思うのです。いずれも、あまりにも当然と考えられている言葉なので、これに疑問を投げかけるといふことは実は大変勇気のいることです。でも、ここに踏み込みませんと、日本を変えることはできないのです。

これらの言葉が、観念となつて一人歩きしてしまつたところに問題があります。観念とは、実際には存在しないのに、人々の頭の中であると思ひ込まれている考へのことです。はつきりいうならば、言葉の蜃気楼です。

よく考えてみて下さい。この世はお互いのつながりで成り立っていますから、他の影響を全然受けない自由な状態というものはありません。無理矢理自由を唱えれば、オヤジ狩りの自由がある、援助交際の自由があるなどという、勝手主義の自由

になるのも当然でしょう。

また、自然界に存在するものは、すべて個性別です。二つと同じものはないのですから、そもそも平等は絵に描いた餅となります。運動会の徒競走で全員を一緒にゴールさせるとか、行き過ぎた男女平等（性差の否定）など、いわゆる悪平等を導いてしまうことにもなるわけです。

民主も言葉に矛盾があります。「民」は多くの人を表すのに対し、「主」は中心に位置する一人を意味します。多くの人が主であるといふことは、誰も主ではないといふのと同じことです。これでは横並びになり過ぎて、リーダーに就こうとする人がいなくなつてしまいかねません。苦勞を伴う責任者になるよりは、自分のことだけ考えていられる立場がいいとする、小粒な人間ばかりが育つてしまつたのも当然でしょう。

個の確立を飛び越して、個々バラバラに

ただし、自由・平等・民主は、それぞれ前提があるならば意味を持ちます。抑圧

された体制からの自由、いわれなき差別からの平等、独裁ではなく民主、などという前提です。

そういうことから、自由は自立や自律、平等は社会的公正、民主は民本や人本と解釈し直してはどうかと思っています。

ともかく、欧米から入ってきたこれらの思想によって、日本社会に自己中心な個人主義が蔓延してしまったことは確かです。個の確立を飛び越して、個々バラバラを導いてしまったのです。観念を人類の理想のごとく受け止めてしまったところに、間違いがあったというわけでしょう。

ここでは詳しく述べませんが、全体よりも部分を注視する科学思想も問題でした。地球環境問題など人類が抱える様々な危機は、部分にとつての便利さが全体の調和を損ねたことの結果と言えます。フロンガス、アスベスト、農薬などがその例です。これからは、科学も全体観を取り戻さなければなりません。

日本思想・東洋思想の復活を

日本復活の三カ条、その三つ目を述べましょう。先に述べた武士道精神に重なりますが、日本思想・東洋思想の復活を挙げたいと思います。

日本思想としては、「中心」「タテイト」「和」がキーワードです。

中心がなければ全体もありません。全体とは、中心の力の及ぶ範囲をいうのです。それが中心論です。「公」を尊んできた日本人は、全体を守るため、常に中心を意識して生きてきたのです。

タテイトは、世代をこえた連続性のことです。芸能や工芸などの伝統文化は、師匠から弟子、親から子への相伝によって守られてきました。

「和」は、個々それぞれが生かされている状態のことです。天分を生かし、処を得る。それを基本に中心と部分がつながり、部分と部分が連係します。そうなることによって得られる全体の大調和、それが「和」です。

また東洋思想としては、「陰陽循環」や「共生」がキーワードになります。

陰陽循環論は、東洋思想の基本原理です。陰と陽は対立関係にはありません。陰がなければ陽はなく、陽がなければ陰もないという一体と共生の関係です。そして、

陰陽の落差が、創造のエネルギーを生みます。

また、陰極まれば陽に転じ、陽極まれば陰に転ずるといふ循環作用でもあります。循環は波動であり、円や曲線を意味してもいます。直線的思考だけでは、どうしても対立と破壊を起こしやすいものですが、曲線的思考を加味することによって、共生と創造の世の中を起すことが可能となります。

人と人、国と国、東洋と西洋、人と自然、これらの共生によって、資本主義の次に来る経済原理や、現代文明を超える新文明の創造を果たすことが、日本の使命だと思えます。

二〇二〇年は、新しい日本の誕生点となる！

これら三カ条、国是とリーダー層、それに日本思想・東洋思想の復活があれば、きっとこの国は甦るでしょう。そして、このことを一番理解できる人が、経営者の皆さんであると思っています。

経営者ならば、目的や目標の大切さ、リーダーの必要性、全体を見ることの重要性、波動や循環で物事をとらえることの意味などをよく知っています。これらを理解できる皆さんにこそ、次代のリーダー層に加わっていただきたいのです。

二〇一〇年～二〇二〇年あたりに来ると思われる底において、社会は「危機の心理」を持つことになるでしょう。黒船にショックを受けた幕末維新期に重なります。そして、底を脱して二〇二〇年頃には、新たな上り坂を起こしたいのです。大化改新や鎌倉幕府成立、明治維新などに匹敵する、いやそれ以上の歴史的誕生点をここに迎えることになるでしょう。

志士・志民の奮闘により、新しい流れを起こせれば「復活の心理」となり、さらに日本人が希望を取り戻すことよって「使命の心理」が芽生えることにもなるはずです。

「脱近代」のために、「明治」を早く終わらせよ

その政治面での担い手は、まだ権力の中核にはいない人たちではないかと予想します。これから幕末の下級武士のような人たちから志士が生まれ、やがて

天下を取って日本を変えていく。筆者は、そう予感しています。

結局のところ今の政治は、明治以降の旧い政治を引きずり過ぎていると思うのです。東京一極集中の中央集権体制、官僚主導政治などがそうです。個々には優秀な政治家がいても、政党や組織が古すぎて若々しさを発揮できません。

明治以降の旧体制を引きずらない新政党。それが今、求められているのだと思います。その新政党には「道州制」を実施するなどして、この国の基本形から建て直してもらわねばなりません。道州制とは、都道府県を廃して、全国を十程度の道州に分割統治する制度です。廃藩置県ならぬ「廃県置州」です。

これによって道州に地域主権を与えれば、首都圏への過度の集中を終わらせることが可能となります。日本列島に十数カ所の中心力（自立力）を起こし、地方を元気にさせようという取り組みです。

こうして、欧米思想の見直しといい、「廃県置州」といい、やらなければならぬことは「脱近代」ということなのです。明治に問題の根がある以上、そこまで掘り下げて根を抜かねばならないというわけです。

食糧危機、石油高騰、環境異変、異常犯罪、人心不安など、現象的には問題が山積みです。しかし、問題が大きいほど、根本からの建て直しが可能となります。

こういう困難で不安な時代ほど、指導者が大事です。武士の気概を持つたりリーダーが、政治家や経営者にどんどん現れ、両者がスクラムを組んで日本改新に立ち上がり、日本再生を実現することができるならば、まだこの国には希望があります。

個々の政策については、次回マニフェストづくりでの最大のテーマになることでしよう。